

国際協働学習における主体的 オンラインコミュニケーションスキルの育成

How to Acquire Autonomous Online Communication Skills in International Collaborative Learning

清水 和久 (人間科学部こども学科教授)

Kazuhiisa SHIMIZU (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

粕野 理子 (津幡町立条南小学校教諭)

Riko KASENO (Tsubata Municipal Jonan Elementary school Teacher)

〈要旨〉

ZoomなどによるWeb会議が頻繁に行われるようになってきた。しかし、児童にそのスキルを育成する方法の確立は十分ではない。とくに指導する教員もその経験が十分でないため、児童に対して、そのスキルを教えこみがちになる。そこで児童がそのスキルを主体的な取得できるように教材を開発し、実践を行った。具体的には、オンラインコミュニケーションがうまくとれずに悩んでいる動画教材を作成し、児童にその教材をもとに改善策を話しあってもらった。その後で実際にZOOM会議をおこない、その効果があったかを検証した。

〈キーワード〉

国際協働学習 オンラインコミュニケーション 主体性

1 はじめに

筆者は2006年度から小学校における国際協働学習プロジェクトを支援しており、石川県内の小学校と外国の小学校とをつなげた活動を行っている。2006年から2016年までは、「アートマイル・プロジェクト*1」といわれる、黒板大のテント地に描いた壁画を日本と外国とで、半分ずつ描くプロジェクトを、2017年度からは、「テディベアプロジェクト」といわれる。クマのぬいぐるみを留学生に見立てて交換留学させ、それぞれの国の様子を紹介するJEARN*2プロジェクトの支援を行ってきた。これらのプロジェクトの途中には、相手を意識させるためにTV会議(webビデオ会議)を入れることが多い。それは、TV会議をすることで、名前や声や顔がわかるので、交流相手の存在を実感できるからである。

しかし、子ども同士がオンラインで英語を使って会話することになるので、これまでは、機器の準備、語学面、そして、コミュニケーションスキル面でのハードルがかなり高かった。しかしGIGAスクール構想により、機器の面では1人1台の環境が実現され、高学年では外国語が週2回実施となったため、機器と語学の面での障害は大幅に緩和された。しかし、もう一つのオンラインでのコミュニケー

ションスキルに関しては、コロナ禍で、教師が授業をする経験は増えたものの、児童自身にオンラインコミュニケーション能力をつけるための指導をおこなう実践はまだあまりないと思われる。

実際に対面(オフライン)では普通に話ができて、オンラインで自分の考えをわかりやすく伝えたり、相手に対して即座に反応を返したりすることは、何らかの練習がないと難しいと思われる。

そこで本研究では、オンラインコミュニケーションスキルを獲得するための教材を作成し、授業として使ってもらい、その有効性を検証することとする。またこのスキルを教師が教え込むのではなく、児童自らが発見する形をとりたい。なぜなら、教師が全体を把握できるクラス対クラスのTV会議の形ではなく、教師がすべてを把握することが難しい小グループでのオンライン会議を想定しているためである。小グループごとのオンライン会議では、自分たちで臨機応変に対応する必要がある、児童がオンラインコミュニケーションスキルとしての対応方法を主体的に見つけ出した経験があれば、臨機応変な対応もできる可能性が高いと考えているからである。

2 研究の目的と方法

2-1 研究の目的

オンラインコミュニケーションスキルを主体的に獲得するための教材を開発し、実践によってその効果と課題を明らかにする。

2-2 研究の方法

- 1) 国際協働学習の枠組みの設定
- 2) オンラインコミュニケーションスキルについて
- 3) 教材の開発
- 4) 教材の授業実践
- 5) 実際のzoomブレイクアウト会議
- 6) 成果と課題

3 研究の内容

3-1 国際協働学習の枠組み

3-1-1 ティーベアプロジェクトでの実施

2020年度より小学校高学年では外国語学習が週2回実施されている。各学期の終わりには、地域の様子を外国の人に伝える等の設定もあり、外国との交流を促す内容にもなっている。そこで、石川県内の小学校と台湾の小学校を結び、国際協働学習であるこのプロジェクトを実行することとした。

ここでいう国際協働学習とは、単に自国文化を相手に紹介するというだけでなく、共通のテーマを設定し紹介しあうことも含めるためである。そこで、JEARNが行っているティベアプロジェクトに参加することとした。このプロジェクトはぬいぐるみを留学生として送り、滞在記を通して、互いの国の紹介を行うプロジェクトである。また、共通の話題を決めて、その調査の発表をゴールとすることもできる。2022年度のティベアプロジェクトは、石川県内6校12クラス、台湾の小学校4校12クラスで実施。合計12組ペアで交流をおこなった。^{*3}

大まかなスケジュールとしては9月に交流を開始し、互いの国にぬいぐるみを留学させる。その後は互いに滞在記を作成し順次知らせる。途中でリアルタイムでの交流となるZOOM会議を行う。12月にはクリスマスカードなどの交換を実際に行う。2回目のZoom会議はさらに一歩踏み込んで共通のテーマ（SGDsなど）でおこなう。2月末には留学生を相手の国に帰国させて、相手国からも日本から送った留学生が帰国して終了となる。ほぼ半年のプロジェクトとなる。

本研究の対象校は、石川県のT小学校6年2クラスと台湾の台北市のJ小学校6年2クラスである。台湾の新学期が始まる9月から交流を始め、交流期間を3月までの6か月間とする。この中でTV会議を複数回実施する。

3-1-2 大学の支援体制

T小学校の6年2クラス（26人）には、支援の大学生がそれぞれ1名付き、台湾の先生との交流をサポートする。具体的には、T小学校の先生とU小学校の先生とのやり取りはグループLINEで行い、そのグループの中に担当の大学生が1名と筆者が参加し、やり取りをモニターする。

またzoomのブレイクアウト会議（小グループでの会議）になると、1グループに1人の大学生が遠隔で入り、各グループの様子をモニターできる体制をとった。各グループともZOOM会議を最低1回は行うこととした。

3-2 オンラインコミュニケーションスキルの課題

3-2-1 これまでの経験から感じられる課題

これまで、クラス対クラスでおこなわれる「団体対団体のTV会議」を多く行ってきた。児童は自分の発表の順番が終わると、他の児童の発表に対しては関心が薄れ、注意力が下がってしまったり、交流相手の言っていることがよくわからない場合も関心が薄れてしまったりした。そしてTV会議自体の興味が失われる場合が多く、その結果発表者本人よりも周りで聞いている子の対応に教師の指導が向かうことが多かった。これは意識が自分の発表にだけむいているため、相手の言っていることを聞き取ろうとする教師の働きかけが必要である。

また、大学生が、小学生の外国とのTV会議の前に練習相手となってTV会議を行ったことがあり、その時の大学生が感じた課題点として、以下の5点を挙げられている。

- ① 発表する時の声小さく聞き取りにくい
- ② こちらの話ししたことに対して反応がなく、伝わっていないかわからない
- ③ 英語での発音が間違っていたり、発言自体が不明瞭だったりする場合、説明内容が伝わりにくい
- ④ 相手の話がわからなくても分からないままにする
- ⑤ 話の終わりどまりのタイミングがつかめない。

この時の練習時には筆者も同席しており、話が終わったかどうかかわからず、言い出せなかったり、今どちらが話す番なのかかわからず沈黙になったりする場合も多かった。また、話の内容がわからない場合でも、そのわからないことをどのように聞いていいか、わからずあいまいに終わらせてしまう場合も多かった。外国の場合は「もう一度言って」といわれることが多いが、日本人がこれを言うのはあまり聞いたことがない。

3-2-2 身に付けさせたいスキル

そこで、上記の課題を踏まえて、下記の5つのスキルの獲得を目指すこととした。

表1 身につさせたい5つのスキル

① 笑顔で大きな声でハキハキと話す力
② 相手のリアクションに対して反応を返す力
③ 話している内容を相手にうまく伝えるために工夫する力
④ わからないことを相手に聞き返す力
⑤ 話の始まりや終わりを相手に伝える力

3-3 教材の開発

3-3-1 教材開発の方針

これらのスキルを身につけるためには、教師が指導内容を話して終わりというのではなく、児童自らに気付かせたいと考えた。道徳のTV番組のように、「どうすればよかったのかの答えは自分達で考える」という方向性である。そのためにTV会議のうまくいかなかった事例のビデオクリップを作り、どうすればよかったのかを話し合いで考えてもらうものにした。内容については筆者と粕野氏が話し合い、粕野氏が作成した。なお出演者も粕野氏とその友人である。

3-3-2 教材の構成

5つの身に着けたいスキルをもとに以下の教材を開発した。

表2 5つの動画教材の中で付けたいスキルの一覧表

動画教材	観点	スキル
2. 話し方についての表現方法	表情・声量	笑顔で大きな声でハキハキと
3. 聞き方についてのリアクション	相槌・身振り手ぶり	相手のリアクションに対して何らかの反応
4. 話している内容についてわからない時の対応	視覚的情報の準備	話している内容を相手のうまく伝える工夫
5. 聞いている内容についてわからない時の対応	聞き返す	わからないことを相手に聞き返せる
6. 話のつなぎ方がわからない時の言い方	話の順番を明示する	話の始まりや終わりを相手に伝えられる。

(2022 粕野)

構成としては、6本立てのビデオクリップで、最初の導入ビデオクリップで、視聴する児童に相談を持ち掛けるという設定で始まる。

内容的には、初めてオンライン会議を行った大学生が演じる小学生が、うまくいかなかったときの様子を思い出して、どうしてうまくいかなかったのかを学習者に問うというものにした。そのため、最初のビデオを他の5つの教材のビデオの見方を解説するものとした。学習者に課題を投

げかけているので、児童は真剣に見て何かアドバイスをしたいという気持ちにさせることができた。



図1 導入ビデオの画面

児童は、困っている児童役の大学生にアドバイスをするという設定なので、何でも言いやすいと思われる。

製作にあたって留意したのは、以下の3点である。

- ①児童が自分事としてとらえられるように失敗モデルを提示する教材とする。
- ②わかりやすいように表現は大きめにし、TV会議を行っている出演者の思っている気持ちを吹き出しで文字化する。
- ③TV会議をする両者の状況が把握しやすいように、1画面の中に両者の画像を同時に表示させる。(図2参照)

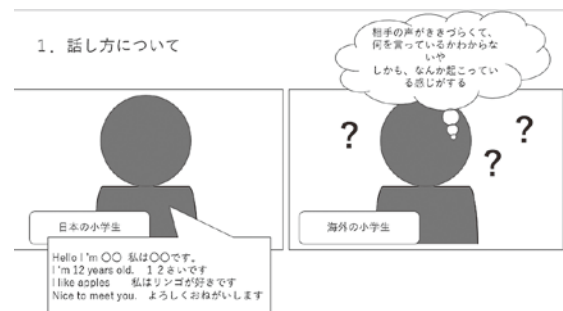


図2 動画教材の画面構造図

学習者はオンライン会議を行っている両者の表情を同時に見られるので、お互いがどのようなことで困っているかを理解することができる。ビデオは日本人の小学生が相談事を学習者に聞く形で進められる。

3-3-3 教材の具体的な内容

以下の5つの設定を考えて、長さは約1分程度のビデオ教材をあわせて6本制作した。(作成者：粕野)

- 1) のビデオの開設のビデオ

日本の小学生役の大学生がみんなに相談事があるという話から始まり、オンライン会議でうまくいかなかったことがあるので、どうすればいいかみんなに考えて欲しいという想定ビデオになっている。
- 2) 話し方のビデオクリップ

相談事：「自己紹介時に相手の反応がよくわからない」

場面設定：日本から自己紹介をするが、ぼそぼそ声で声が小さく相手に伝わらない。相手がわかっているかどうかよくわからないので話が續かない。

問いかけ：相手にわかりやすく自己紹介するにはどうすればよいか？

3) 聞き方のビデオクリップ

相談事：「会話をしているも盛り上がらない」

場面設定：日本から“What food do you like?”と尋ね、相手が“I like pizza”と答える。この時に日本人は自分もpizzaが好きと思っているが、にこにこしているだけなので、相手にpizzaが好きという気持ちが伝わらない。

問いかけ：相手に自分の気持ちを伝える方法は？

4) 話し方のビデオクリップ

相談事：「相手に情報をうまく伝えられない」

場面設定：日本から好きなスポーツを聞いてみたら、相手がバトミントンと答えた、相手からも聞かれたので、剣道と答えた。でも相手は剣道の事を知らないようである。

問いかけ：自分の説明したいことを相手に知らなかった時に、どうすればいいかな？

5) 聞いている内容の相手からの情報が理解できなくて

相談事：「相手からの情報がうまく理解できない」

場面設定：日本から“What sports do you like?”と好きなスポーツを聞いてみたら、相手から“I like インディアカ”と答えが来てきた。しかし、このスポーツは知らないで反応に困っている。

問いかけ：相手の説明していることがわからない場合相手にわからないということを伝えるにはどうすればよいか？

6) 話のつなぎ方について

相談事：「話を始めるタイミングが合わなくて、気まずくなってしまう」

場面設定：日本から“What color do you like?”と聞いて相手は“I like black”と答えてくれたので“Really? me too”と答えた。しかし、そこで沈黙が續く。日本側は、自分の質問が終わったので、次は相手の番だと考えている。相手側は、まだ質問があるのかもしれないと待っている。それで沈黙の時間となる。

問いかけ：どちらが話せばよいかをはっきりさせるのはどうしたらよいか？

以上の6本のうち、T小学校には、3. リアクション 5. 聞いている内容、6. 話のつなぎ方の3本について実践をおこなってもらった。2. 話し方と4. 話の内容については、時間の関係で事前に学級担任が別日に行っていた。

3-4 授業の実際



図3 教材を見ている実際の授業の様子（紘野撮影）



図4 授業の板書（（紘野撮影）

授業は、「3本のビデオ視聴→個人で考える→ハンデ問題点や改善策を話しあう→全体で意見を共有する」という流れで行われた。

表3 5本のビデオの視聴後に話し合われた内容

動画教材	改善点	改善策
2. 話し方についての表現方法	表情・声量	もっと笑顔で大きな声でハキハキという
3. 聞き方についてのリアクション	相槌・身振り手ぶりを大きにる	聞いているという動作をする。驚いているなどのおおげさな表現をする。
4. 話している内容について相手が理解していない場合の対応	理解してない場合の別手段の方法	話している内容が難しいければ、写真や動作で示すやり方がある
5. 聞いている内容についてわからない時の対応	聞きとれないことを伝える	I can't hear. Please say it again. Once more please. もう一度言ってもらおう。
6. 話のつなぎ方がわからない時の言い方	どちらが話すのかを明確にする	・話が終わったら That's all. ・あなたの番 Your turn.

授業のまとめとしては、当日は時間がなくできなかったが、後日担任から『「コミュニケーションで大切なことはジェスチャーと笑顔と表情』ということが児童の話し合いのまとめとして共有された』と連絡をいただいた。また、教師の報告書の感想からは「ほとんどの児童が、動画を視聴後、改善点と改善策をワークシートに記載しており、班で話し合いをする場合も『僕は～、私は～』という形で自分の意見を言っていたことから、主体的に自分の考えを述べていることがわかる。」とのことであった。

3-5 授業後のzoomブレイクアウト会議

3-5-1 第1回目の台湾とのZoom会議

教材視聴の話し合いの後、小グループでzoom会議を行った。

日時 11月7日(木)

グループは1グループ日本5人台湾4人、全部で4グループに分けておこなった。各グループには大学生が共同ホストとして遠隔から入りサポート及び録画を行った。

Zoom の主な内容

- ① 台湾の学校紹介
- ② ブレイクアウトに分かれて小グループでの自己紹介
- ③ 日本の絶滅危惧種（トキ）の発表（小グループ）
- ④ 台湾の絶滅危惧種（ホタル）の発表（小グループ）
- ⑤ 写真撮影

3-5-2 台湾とのZoom会議での効果

録画から日本の児童の様子を分析した。

表4 zoomでの結果

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1) 聞き方（台湾からの返答に対して、何らかの反応をする姿が見られたか割合 10人（53%） 2) 聞いている内容について（相手に尋ね返していたか）今回は、スムーズに話が進み、尋ね返す必然性がなかったので該当の事例がなかった。 3) 話のつなぎ方について（話の始まりや終わりを合図する言葉や動きが見られた）18人（95%） |
|---|

ここで、できているとカウントした児童は、「自主的にできた児童」と「教師の支援を受けてできた児童」である。

この教師の支援を受けてできたという児童は、教師のアドバイスを受けてすぐその意味を理解して行っているのので、できたとカウントする。アドバイスをされてすぐ対応できるのは教材を見て自分で考えた経験があるからであるととらえる。

・聞き方について

反応が悪かった原因として教材では自分が質問した答えに対して、自分と同じものを好きだった場合の反応の仕方であり、予想とは違うものだった場合の英語での反応の仕方を具体的に示してなかったためと思われる。そのため予想に反した答えの場合は無反応となったしまった可能性が高い。

・話のつなぎ方について

あなたの番“Your turn”私の番“My turn”、おしまい”That’s all”などはほとんどの児童が言えていた。また多くの児童がジェスチャーもつけているので、相手に対しての意思表示ができていた。つなぎ方に関してはビデオ教材をもとにした話し合いの効果が高かったといえる。

担任の先生からは、「小グループでの活動では、児童一人一人が何とかして自分のペアを呼び合い、自己紹介しよ

うとする姿がよく見られた。台湾からの話もハウリングが少なく、どのグループにおいても交流会は盛り上がっている様子だった。」との報告を受けた。

また児童からは「自分の英語が伝わるか不安だったけど、練習した成果を出して話すとペアの児童がしっかりと話を聞いてくれて嬉しかったです」との感想も聞かれたこのことから考えさせるビデオ教材の効果は高かったと思われる。との感想をいただいた児童からはとの感想もあった。

3-5-3 第2回目の台湾とのZoom会議

日時 3月9日(木)

主な内容

日本：小学校での思い出の発表（小グループ）

台湾：台北市の紹介（クイズ形式）

実施方法は、最初に小グループで日本の6年生のベストメモリーを紹介した後、台湾の台北紹介を全員で聞いた。ここではアンケートなどは足らず観察のみとした。6年のこの時期の英語の学習は、NEW HORIZON ELEMENTAR のユニット7でMY best memoryという単元があり、小学校の思い出を語る場面がある。日本の小学生はそれぞれの思い出を台湾の交流相手に話すことができた。1回目より堂々とし態度でやりとりも活発に行われていた。なかでもこのテディプロジェクトをベストメモリーに選んで台湾の小学生に対して話している姿が印象的であった。小グループでのZoom会議は表情もよくわかり、感情移入もしやすい。日本側はbest memoryということで説明用の絵を準備しており画像の手助けもあり堂々と話すことができていた。

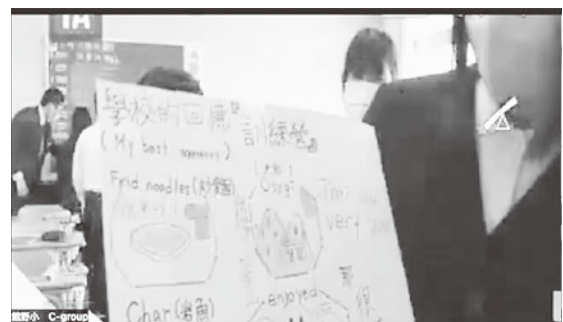


図5 Zoom小グループ会議（日本側の画像）

日本の発表が終わった後は、台湾の小学校からは台湾の台北市を舞台にした環境問題にかかわる蛍クイズであった。台湾のこどもたちは表眼力があり、この場面では蛍の衣装を着て、蛍の目から台北市を紹介するという形で行った。日本側は聞く一方であったが、相手のクイズに対して積極的に参加して答えを返していた。



図6 台湾側の発表画面（台北市のクイズ）

画面中央にいるベアは日本から送ったテディベアである。画面では飛んでいるホテルがあいさつをしている設定で、これからの発表を示唆していて興味深い。

4 まとめ

小グループのzoom会議は顔の表情もよくわかり親しみが持てるやり方である。決まったことを暗記して大きな声ではっきり話すという発表から、小グループで相手の反応を見ながら臨機応変に話すプレゼン（外国語でいうと、話すうちの「やりとり」がこれからはもっと必要とされると思われる。外国との交流となるとますますオンラインでの実施の確率が高くなる。

今回は、実際のzoomでの交流の前に、オンラインコミュニケーションがうまくとれない事例の教材で小学生役の大学生のヘルプを考えるものであった。クラスで話し合いを行った結果として出てきたキーポイントが、「コミュニケーションで大切なことはジェスチャーと笑顔と表情」で

あった。これはみんなで考えたからこそ出てきたもので、これを共通の土台としてオンライン会議に臨むことができた。1回目では話をつなぐスキルとしては95%の児童は意識して行っていたスキルとなった。

今後ますます海外との小グループzoom会議を経験することでオンラインコミュニケーションスキルの必要性が自覚されるとともに、教え込みではないスキルの獲得方法も重要になってくる。

答えをいつも教えられるのではなく、答えのない問題に対して自分たちで考え、自分たちナルのやり方を見つけ出していく今回の方法大切にしていきたい。

課題としては、今回は日本側しかオンラインスキルを意識していなかったため、台湾側との意識の違いがあったため、子ども同士のやり取りがスムーズにできなかった。

今回は台湾のこどもたちにも同じ教材を見せたいのでzoom会議を行ってみたい。その場合は今回の教材を英語版に直すかもしくは台湾語にリメイクするかで行う予定である。

GIGAスクール構想と外国語の教科化でますます児童同士の小グループzoom会議がやりやすくなってきた。言語の壁を越えて同世代のこどもたちの交流を進めることは、日本のこどもたちの発信力、表現力を高め、英語をツールとして使うことで、相手を理解し、共に生きていきたいという多文化共生の考えにもつながると思う。

次年度以降もオンラインコミュニケーションスキルを育成する教材を開発し台湾と合同で検証を行っていきたい。

注

- (1) Japan artmile projectS
<http://artmile.jp/activity/iime/>
- (2) JEARN (グローバル教育推進機構)
<https://www.jearn.jp/>
- (3) 国際協働学習における主体的な学びのために
—Teddy Bear Projectを通して—
国際理解教育学会第32回研究大会 研究発表抄録
金沢星稜大学人間科学部 清水和久 2023.6